



モンスーンに乗りインド洋を越えるアフリカとアジアの交流は古くからありました。移動と交流によって生まれる現代美術の新たな視点の転換が、両地域のダイナミックな足跡と創造性を教えてくれます。本展では、アフリカに関わる現代美術を中心に紹介します。

展覧会名	—モンスーンに吹かれたように— 大移動と交流のアフリカ-アジアの現代美術
会場	岐阜県美術館 展示室3（岐阜市宇佐4-1-22）
会期	令和8年3月13日(金)－令和8年6月14日(日) ※休館日：毎週月曜日(祝・休日の場合は翌平日)、5月7日[木] ※臨時休館：3月30日[月]－3月31日[火] ※夜間開館：令和8年3月20日[金・祝]、4月17日[金]、5月15日[金]は20:00まで ※展示室の入場は閉館の30分前まで
料金	一般 一般1,000円(900円)、大学生800円(700円)、高校生以下無料 ()内は20名以上の団体料金 ※身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、特定医療費(指定難病)受給者証または登録証の交付を受けている方およびその付き添いの方(1名まで)は無料 ミライロIDが利用できます
主催	岐阜県美術館
共催	中日新聞社
後援	NHK岐阜放送局

■最新の情報は岐阜県美術館ウェブサイトでご確認ください

本資料に関するお問い合わせ



〒500-8368 岐阜市宇佐4-1-22

TEL 058-271-1313(代表) FAX 058-271-1315

URL: <https://kenbi.pref.gifu.lg.jp>

広報担当：小野
担当学芸員：西山



県美術館
Webサイト

美術館の情報を発信しています



公式Facebook



公式Instagram



公式X

E-mail: kouhougifukenbi@govt.pref.gifu.jp

本展覧会について

歴史に名を残す岐阜ゆかりの武将・織田信長には、モザンビーク出身とされる弥助という家臣がいたことが『信長公記』などに伝えられています。弥助の存在は、季節風に乗ってインド洋を越えてきたアフリカとアジアのダイナミックな移動と交流を象徴しています。そして現代では、移動が活発化し、アフリカとアジアの間でも交流が深まったことで、作品の制作にも新たな影響関係が生まれています。移動と交流によって生まれる現代美術の視点の転換が、自らのアイデンティティを見つめ直し、人類の持つ創造性の豊かさを捉え直す機会を与えてくれるでしょう。本展では、アフリカに関わる現代美術を中心に、アフリカ人が描かれた桃山・江戸初期の屏風や、岐阜県美術館所蔵のティンガティンガ絵画をあわせて展示し、紹介します。

【主な出品作家】

◎石川真生 Ishikawa Mao (1953-) 琉球政府(現・沖縄県)大宜味村生まれ

1972年、アメリカから沖縄が返還される頃にシャッターを切るようになる。石川が撮影する被写体には、沖縄に関わる人物であれば、駐留するアメリカ兵も、自衛隊員も、一般の人々も区別なく、国家の枠組みから離れて今を生きる人たちとして登場している。2017年に再版した『赤花アカバナー 沖縄の女』のテキストには次のようにある。「米兵相手のバーで働く女たちを卑下する人もいる。(中略)人を上から目線で観る最悪な価値観だ。そんな偏見を私ははねのけたい。街の女たちは堂々と自分の人生を歩んでいた。誰も他人の人生にとやかく言う権利はない。黒人を愛した女たちが私は愛おしくてならない。」



石川真生「アカバナー」(1975-77)より
©Mao Ishikawa

◎エリアス・シメ Elias Sime (1968-) エチオピア アジスアベバ生まれ

エチオピアが軍事政権下で民族間での争いが激しかった当時の1986年にエチオピア大学のアレ美術デザイン学校で芸術を専門的に学び始める。1990年代からアジスアベバで毎年のように作品を発表しながら国際交流展にも出品している。本作の「Tightrope」というタイトルは「綱渡り」を意味していて、技術革新が可能にしたイノベーションと、それが環境に及ぼす悪影響との間の危ういバランスを表している。



エリアス・シメ《タイトロープ・モバイル》(部分) 2009-14
Elias Sime, *Tightrope Mobile*, (part) 2009-14
Courtesy of the artist and James Cohan, New York
Photo: Adam Reich

◎ワンゲシ・ムトウ Wangechi Mutu (1972-) ケニア ナイロビ生まれ

美術を専門的に学ぶために故郷を離れ、ウェールズ、続いてニューヨークにわたり、クーパー・ユニオンで美術学士号を取得、そこでストリート・アートの動向に刺激を受け、自らのアイデンティティを表すコラージュ作品を発表するようになる。本展出品の映像作品《あらゆるものを食らうはてに》は、自然を搾取し続ける物質主義と、家父長制社会による女性への抑圧への反乱を思わせる作品になっている。



ワンゲシ・ムトウ《あらゆるものを食らうはてに》(映像の部分) 2013
Wangechi Mutu, *The End of eating Everything*,
(still of the film) 2013. Courtesy of the artist

◎フィエル・ドス・サントス Fiel dos Santos (1972-) モザンビーク マプト生まれ

モザンビーク独立後の内戦が激しい時代に幼少期を過ごす。幼少期には絵を描いてはそれを売って生活の糧にしていた。後に電気工学を学び、技術者として働く一方、1991年ごろ本格的に創作活動を始める。1997年に「ニュークレオ・デ・アルテ」で行われた「銃を鋏に」によるワークショップに参加して以降、溶接技術とビジュアルアートのワークショップを自ら開催するなど武器を用いた作品を制作するようになる。



Fiel dos Santos
Flautist
2012(国立民族学博物館蔵)

◎ジョエル・アンドリアノメアリソア Joël Andrianomearisoa (1977-)

マダガスカル アンタナナリボ生まれ

2003年、パリ建築大学で建築士の資格を取得する。様々な媒体や素材を用いて、彫刻、インスタレーション、テキスタイル、建築など職人技を生かしアプローチする。2024年以降の「ある自画像についての観念」シリーズでは、学生時代に身につけていたユニフォームから最近のお気に入りのブランドまで切り刻まれた布切れを素材にしている。本展では、日本滞在時の体験による着想から生まれた新規制作も初公開する。



ジョエル・アンドリアノメアリソア「風の宮殿」より、2026
Joël Andrianomearisoa, in "Le palais des vents," 2026
photo: Studio Joël Andrianomearisoa

◎チェ・ウォンジョン Che Onejoon (1979-) 韓国 ソウル生まれ

職業学校で写真を学び、兵役中に写真家としてのキャリアをスタートした。彼の主なプロジェクトには、北朝鮮がアフリカ諸国に建造した記念碑や像を調査する「インターナショナル・フレンドシップ」、北朝鮮で育った赤道ギニア人女性を主人公にしたドキュメンタリー劇場「マイ・ユートピア」、そして本展出品の「キャピタル・ブラック」などがある。研究者としても多岐に活動し、国際主義の歴史的理想が現代の芸術実践を通してどうすれば再び活発になるかを探求している。



チェ・ウォンジョン(三姉妹、坡州)「キャピタル・ブラック」より 2021
Che Onejoon, *Three Sisters, Paju*, in "Capital Black,"
2021 Courtesy of the artist

◎長谷川愛 Hasegawa Ai 日本 静岡県掛川市

2000年に岐阜県立国際情報科学芸術アカデミー(現 IAMAS)を卒業、同校で特別研究員を務めた後にイギリスに渡り、2010年から英国王立芸術大学院大学(RCA)にて「スペキュラティブ・デザイン」を学ぶ。本展出品の《Alt-Bias Gun》は、人間の奥底に潜む差別意識と暴力性を顕在化し、それを指先で感じとる装置となっている。撃たれる側でなく撃とうとする側に告発の指を突きつける。



長谷川愛《Alt-Bias Gun》2018

◎吉國元 Yoshikuni Moto (1986-) ジンバブエ共和国 ハラレ生まれ

幼少期までジンバブエ共和国ハラレで育ち、1996年に両親と共に日本に帰国、多摩美術大学造形表現学部にて学ぶ。大学在学中、ジンバブエで出会った人々を描きはじめる。吉國の代表作となる「来者たち」の連作は、過去と現在、アフリカと日本が入り混じり、幼少期にジンバブエで実際に出会った人々、父と母、妹の家族、日本で出会ったアフリカ人たちのポートレートと1点の自画像で構成されている。本展では、「来者たち」連作と、作者自身で出版している雑誌「MOTO MAGAZINE」関連作品をあわせて展示する。



吉國 元《バ・アの肖像》
(『MOTO マガジン vol.002』より) 2022

◎マフディ・エシャーエイ Mahdi Ehsaei (1989-) ドイツ ミュンスター生まれ

ドイツのミュンスターで、イラン人の両親のもとに生まれる。ダルムシュタット応用科学大学のデザイン学部で、デザインと写真を学ぶ。大学の卒業に向けて彼が開始したプロジェクト「アフロ=イラン:知られざるマイノリティ」のためにクラウドファンディングを行い、彼の両親の母国であるイランの外から見ては見過ごされそうな人々の調査に乗り出し、撮影と写真集の出版を行う。彼の写真には、故郷の小さなコミュニティに入り共有した穏やかな日常が捉えられている。



マフディ・エシャーエイ《アーミンとレザ / ガーダーカーニ》
(「アフロ=イラン」より) 2014

Mahdi Ehsaei, Armin and Reza / Ghader Khani, in "Afro-Iran," 2014

◎なみちえ NAMICHIE (1997-) 日本 神奈川県茅ヶ崎市

ガーナ人の父と日本人の母の長女として生まれる。中学生の頃から着ぐるみを制作、本展出品の「Kigroom」シリーズに繋がる。着ぐるみを身につけることで、差別的な視点を遮断し、人を傷つけない絶対的な距離が確保されると思いつく。東京藝術大学先端芸術表現科、在学中に平山郁夫賞を受賞、卒業展への出品作が大学で買い上げられた。

ラッパー、ミュージシャンとしても活動している。



なみちえ《こあ(心に愛のある犬)》
(「Kigroom」より) 2023 撮影:片岡佑太

【特別出品】

◎前期展示:《相撲遊楽図屏風》(六曲一隻)と《異国人物図巻》(二巻)

後期展示:《南蛮屏風》(六曲一双)

堺市博物館のある堺市は、中世に会合衆と呼ばれる商人たちが自治的に都市を運営したおかげで商業都市として確立し、南蛮貿易で発展して、信長・秀吉の支配下に入り直轄領となった歴史がある。そうした歴史を強く感じさせる3点を展示する。



《相撲遊楽図屏風》(六曲一隻)江戸時代(堺市博物館蔵)
【特別出品・前期展示】※会期中展示替えあり



《南蛮屏風》(六曲一双)江戸時代(堺市博物館蔵)【特別出品・後期展示】※会期中展示替えあり

関連プログラム

■ギャラリートーク

出品作家・関係者に作品の前でお話しいただきます。英語通訳有。
当日の参加者・順番については当館 Web サイトをご確認ください。
日 時:3月13日[金] 13:00-16:00
場 所:展示室3 ※要観覧券、事前申込み不要

■《Alt-Bias Gun》の実演

日 時:3月14日[土] 11:00-12:00、6月14日[日] 15:00-16:00
場 所:展示室3 ※要観覧券、事前申込み不要
出 演:長谷川愛

■アーティストトーク

出品作家・関係者より、今までの創作についてお話しいただきます。英語通訳有。
当日の参加者・順番については当館 Web サイトをご確認ください。
日 時:3月14日[土] 13:00-16:00
場 所:講堂 ※聴講無料、事前申込み不要、定員 170 人

■本展担当学芸員によるトーク

日 時:3月20日[金・祝] 14:00-15:00、5月6日[水・祝] 14:00-15:00
場 所:多目的ホール、展示室3 ※要観覧券、事前申込み不要
担 当:西山恒彦（岐阜県美術館学芸員）

■ナンヤローネ アートツアー

日 時:4月29日[水・祝] 14:00-15:30
場 所:多目的ホール、展示室3※要観覧券、要事前申込み
担 当:岐阜県美術館教育普及係

※関連プログラムに変更がある場合もございます。最新情報は岐阜県美術館 Web ページでご確認ください。

同時開催

- 3/15(日) グラフィックデザインの曙ー加藤孝司とシルクスクリーン
- 3/29(日) 生誕 120 周年 坪内節太郎 / 没後 130 周年 牧野伊三郎
- 3/29(日) ルドンと音楽
- 3/29(日) 見慣れない風景
- 3/29(日) ぎふの日本画 冬来たりなば 春遠からじ ー岐阜県ゆかりの画家が描いた花鳥ー
臨時休館日:3月30日(月)、31日(火)
- 4/1(水) ~ 6/28(日) 加藤栄三・東一と岐阜県ゆかりの日本画家
- 4/7(火) ~ 7/12(日) 生誕 150 年北蓮蔵展
- 4/7(火) ~ 7/12(日) 絵画セレクション
- 4/7(火) ~ 7/12(日) ルドンコレクションから:物語と絵画
- 4/9(木) ~ 5/24(日) アーティスト・イン・ミュージアム AiM Vol.19 さとうくみ子
- 5/12(火) ~ 6/28(日) 新収蔵の現代美術

※内容に変更がある場合もございます。最新情報は岐阜県美術館 Web ページでご確認ください。

岐阜県美術館 企画展



広報画像貸出申込書

FAX 送信番号:058-271-1315

- モンスーンに吹かれたように -

大移動と交流のアフリカ-アジアの現代美術


岐阜県美術館
THE MUSEUM OF FINE ARTS, GIFU

貴社名			ご担当者名		
媒体名			(掲載コーナー、特集名:)		
ご住所	〒				
ご連絡先	TEL:			FAX:	
	E-mail:				

1. ご紹介いただける場合、貴媒体の情報をお知らせください。

掲載/放送	月	日	発売・放送(月号)	発行部数	部
掲載内容					

2. 広報画像はご使用になりますか。

 はい 画像データ到着希望日(月 日)
 いいえ(写真は使用せず、文字掲載のみ)

3. 別紙の写真をご参照の上、ご希望の【画像番号】にチェック☑してください。

下記キャプションの作品名称、所蔵、クレジットを必ずご記載ください。

<input checked="" type="checkbox"/>	番号	ご掲載時のキャプション表記
<input type="checkbox"/>	①	石川真生「アカバナー」(1975-77)より ©Mao Ishikawa
<input type="checkbox"/>	②	エリヤス・シメ《タイトロープ・モバイル》(部分) 2009-14(タグチアートコレクション/タグチ現代芸術基金) Elias Sime, <i>Tightrope Mobile</i> , (part), 2009-14 Courtesy of the artist and James Cohan, New York, Photo: Adam Reich (部分写真と全体写真両方とも提供できます)(著作権者による画像データでのゲラの確認が必要となります)
<input type="checkbox"/>	③	ワンゲシ・ムトゥ《あらゆるものを食らうはてに》(映像の部分) 2013 Wangechi Mutu, <i>The End of eating Everything</i> , (still of the film) 2013 Courtesy of the artist (著作権者による画像データでのゲラの確認が必要となります)
<input type="checkbox"/>	④	フィエル・ドス・サントス《フルート奏者》2012 Fiel dos Santos, <i>Flautist</i> , 2012(国立民族学博物館蔵)
<input type="checkbox"/>	⑤	ジョエル・アンドリアノメアリソア「風の宮殿」より(部分)、2026 Joël Andrianomearisoa, in "Le palais des vents "(part), 2026 photo: Studio Joël Andrianomearisoa
<input type="checkbox"/>	⑥	チェ・ウォンジョン《三姉妹、坡州》(「キャピタル・ブラック」より) 2021 Che Onejoon, <i>Three Sisters, Paju</i> , in "Capital Black," 2021 Courtesy of the artist (著作権者による画像データでのゲラの確認が必要となります)
<input type="checkbox"/>	⑦	長谷川愛《Alt-Bias Gun》2018
<input type="checkbox"/>	⑧	吉國 元《バ・アブの肖像》(『MOTO マガジン vol.002』より) 2022
<input type="checkbox"/>	⑨	マフディ・エシャーエイ《アーミンとレザ/ガーダー・カーニ》(「アフロ・イラン」より) 2014 Mahdi Ehsaei, <i>Armin and Reza / Ghader Khani</i> , in "Afro-Iran," 2014
<input type="checkbox"/>	⑩	なみちえ《こあ(心に愛のある犬)》(「Kigroom」より) 2023 撮影:片岡佑太
<input type="checkbox"/>	⑪	《相撲遊楽図屏風》(六曲一隻)江戸時代(堺市博物館蔵)[前期展示]
<input type="checkbox"/>	⑫	《南蛮屏風》(六曲一双)江戸時代(堺市博物館蔵)[後期展示]

■ 広報画像一覧

①



石川真生「アカパナー」(1975-77)より
©Mao Ishikawa

②



エリマス・シメ《タイトロープ・モバイル》(部分)2009-14
(タグチアートコレクション/タグチ現代芸術基金)
Elias Sime, *Tightrope Mobile*, (part) 2009-14
Courtesy of the artist and James Cohan, New York

③



ワングシ・ムトゥ《あらゆるものを食らうはてに》(映像の部分) 2013
Wangechi Mutu, *The End of eating Everything*, (still of the film) 2013
Courtesy of the artist

④



Fiel dos Santos
Flautist
2012(国立民族学博物館蔵)

⑤



ジョエル・アンドリアノメアリスア「風の宮殿」より、2026
Joël Andrianomearisoa, in "Le palais des vents," 2026
photo: Studio Joël Andrianomearisoa

⑥



チェ・ウォンジュン《三姉妹、坡州》(「キャピタル・ブラック」より) 2021
Che Onejoon, *Three Sisters, Paju*, in "Capital Black," 2021
Courtesy of the artist

⑦



長谷川愛《Alt-Bias Gun》2018

⑧



吉園 元《バ・アブの肖像》
(『MOTO マガジン vol.002』より) 2022

⑨



マフディ・エシャーイ《アーミンとレザ/ガーダー・カーニ》(「アフロ・イラン」より) 2014
Mahdi Ehsaei, *Armin and Reza / Ghader Khani*, in "Afro-Iran," 2014

⑩



なみちえ《こあ(心に愛のある犬)》
(「Kigroom」より) 2023 撮影:片岡佑太

⑪



《相撲遊楽図屏風》(六曲一隻)江戸時代(堺市博物館蔵)
【特別出品・前期展示】※会期中展示替えあり

⑫



《南蛮屏風》(六曲一双)江戸時代(堺市博物館蔵)【特別出品・後期展示】※会期中展示替えあり



【広報画像使用に関する注意事項】

- 本展広報目的での使用に限ります。
- 展覧会名、会期、会場名は、必ず掲載してください。
- 作品画像は全図で使用してください。
- トリミングや文字を重ねるなどの画像の加工・改変はできません。
- 転載などの2次使用をされる場合には、別途申請いただけますようお願いいたします。
- Webサイトに掲載する場合は必ずコピーガードをしてください。
- 掲載・放送後は必ず、掲載誌・同録テープ・DVD等を、岐阜県美術館へ1部お送り願います。
- 会期中の会場取材・撮影をご希望の場合は岐阜県美術館までご連絡ください。